

2/27
2
103

FUJINENZETSUSHINAN

婦人演說指南全

香川倫三著

大阪 駸々堂本店梓

076814-000-6

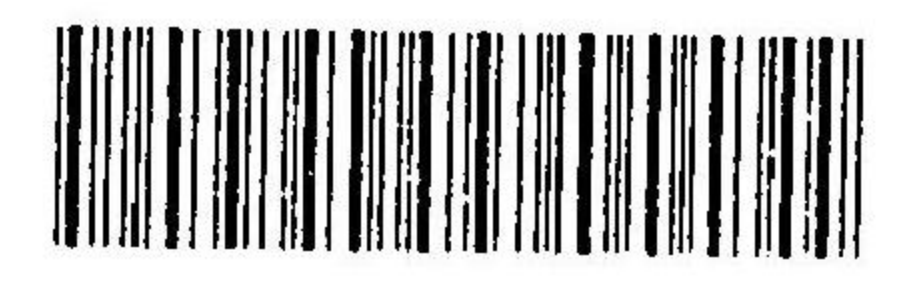
特19-857

婦人演說指南

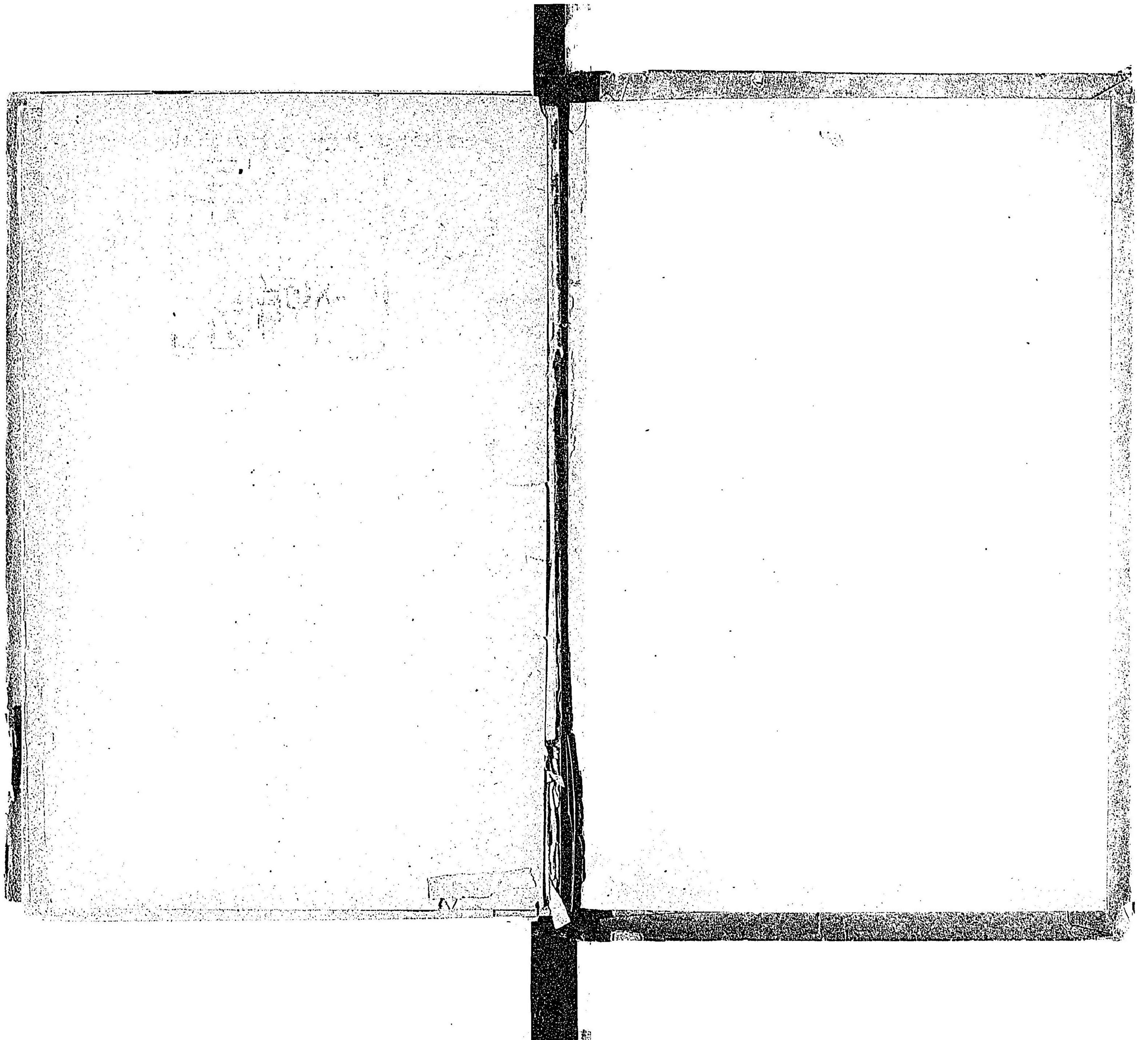
香川 倫三/著

M20.12

DAB-0172



特



No. 7337

第19

857

FUJINZETSUSHINAN

大阪

婦

香川倫三著

人演說指南全

駸々堂本店梓



○婦人演説指南

内地雑居は停車場で切符を購ふて待つ汽車の心地ゝられ、廿三年の國會は同待の電信の感あり、男女同權は食客の待つ午砲に等しく思ひゝが、恐るべく驚くべく進歩せしは婦人の學識敢えて男子に一步を譲らず置位の高尙なる文明の今日壇上に臨んで演説なす活潑の婦人開化の令嬢に「演説指南」の小冊は舊語を以て評するときば所謂釋迦に説法ならんが社會と風俗の改良説に泥水黨と輕蔑されし花柳婦人も一步を進めて近時藝妓の演説會が一般流行の問題となりて其當局者たる辨士(否)辨妓諸子ハ十中八九ハ無

學文盲壇上に臨んで聴衆に對ひ堂々辨ずる演題の主意は
辯者自から考按する學力もなく材料も議論も經驗も無我
夢中或は一の書生に依頼し又は鼻下長の學者が自稱の擬
辯士たる某氏に頼んで漸く不完全なる(否確手たる)論旨を
乞ひ得て漢字は傍訓一字讀みエー何……ト下等俳優が稽
故中に臺詞を讀と恰も同一腹中へははまらずまづ咽の邊
りに寄宿なして一度溝またぐれば忽ちに忘る、如き無氣
力も何月何日午後何時よりと各新聞へ廣告の効用は迅速
會場は立錐の地もあら取かゝりや日頃の廣言三絃の皮よ
厚き御面皮も御座附吹ふ調子とは何だか規りも悪

まづ聴衆よりヒヤ〇く〇とあせり出たる手詰め際は此一
本に記載する條々を平日に記憶なり置く効驗は鬼に鐵棒
で傍若無人堂々と演説するの一助となる保險は満場喝采
拍子ボンクながら順序を追ふて一讀一考記憶なすべし

第 壹

一まづ演壇に臨んでは泰然と満場を一觀なり聴衆に禮を
なり借てテエプルにあるコップに水をつぎ心づかに
咽をうるほすべし

第 貳

一 聴衆に對して不敬なく謙遜の意を示すを以てよとす
我意慢心を慎むべし

第 三

一 演題の主意に依りて演述なす辯法も相異なれば其意を
能くく注意なす適當の口調をもつてすべし

第 四

一 如何なる能辯者と雖ども其の思想なしたる論旨と我が

前後に出席なす辯者の演題を比較し他人(即ち前後)の主
意と同一或ひは錯雑なる時は意外の不利益となるなり
依りて最初に順序を撰定し置くべし

第 五

一 婦人の演説は論旨よりも第一着に音聲調子或ひは綺語
を以て聴衆に感情を發さすものなればよくく夫れ等
も注意すべし

第 六

一 豫じめ音聲調子を定めると雖ども壇上に臨んでは時機と場合により聴衆の舉動共性質の如何に依りて即妙の點より従つて臨機應變なる言語を用ふべし

第七

一 輕卒に聴衆を輕蔑し論旨の如何を不問不完全なる發言をなす可からず能々聴衆の品行舉動に應じ或は激なる口調を好むか或は和辯に賛成するか滑稽を混交て満足を與へんか或る嘲弄の言を使用して喝采を試みんらば辯者の經驗に富みたる處と且遁辭ともなるを得るべし

第八

一 自ら按出せんと欲する演説の本旨はまづ當時専ら世上に喋々なす一主義か一の輿論の問題を材料となり人心感動を旨とせ喜びなすゝむるべし

第九

一 陰陽の言語は都て音曲に用ゆるべきなるが演説も其一部分と見做し論旨の性質と論中の意味に應じて此意は嚴格を旨とせ此處は勇壯に逃べ或は憤怒恐懼の場合に至りては音聲も特に高く慷慨を訴へ悲憤を語るには

各自共情態を寫し尙華麗粧飾威嚴恭順適宜活用專一とすべし

第十

一演說熱心の婦人は品行方正は論をまたずといへども平日讀書に勉強し著書の意味を研究し演說の材料たらん書籍或は新聞雜誌は勉めて熟讀し社會の交際を求め名譽名望を第一とすべし

第十一

一平日應對の言語も勉て注意を加へ置く時は演壇に上りて陳述なすに際し本論の主義も自ら聴衆に了解し言語の活用も其効著しきものなり

第十二

一論旨の性質を思考按出するに際してはまづ徹頭徹尾満足せしむるは難きものなれば一の論旨中此箇所は演題主意適當なれば此調子の言語を用ひ此説に當りては首しめ力を入れべきら末段に用ふべきか寧ろ中段に用ふべきかの點は最初考按のときに豫じめ研究をす置くべ

第十三

一言語の作用を肝要適切なりと類りに之等に熱心工夫を
 ころし却て論旨を錯乱すべからず故に言語は姑らく措
 き其欲する處の演説は明確なる思想完全なる考按をな
 玄人情の然らざる處は如何なる點に多く關係あるや
 否哉充分に再考すべし一時按出したる論旨を猥りに口
 外なすべからず最初胸中に按出なせざるを自ら満足とせ
 んより再考正確を以て喝采を博すべし

第十四

一前條にも起載はしたれど場所と時機を不顧一定の言語
 を用ふるは第一の不覺なり策のいたらざるなり能く共
 の順序をも(按出したる論旨)再考し席に臨みて悠然たる体
 裁肅然たる舉動を以て自己の意見を推造し聽衆の反對
 を撃破すべきなり

第十五

一既に記せし如く出席の時機順序を撰み正すは幾分か得
 策と雖ども幹事或は會主より豫定したるを強て亂す時

は却つて不權式となり卑劣の至りなりと同志者の笑ひを醸す事あるべき

第十六

一如何なる活潑なる精心を有する婦女子たりともまづ壇上に臨む時は勉めて脆弱の容を示さ平凡の處女の如く柔和を表し偕て諸君よく一言を發するに際し氣力と共に勢位を示すべし

第十七

一聴衆に反對者あるか或は無頼の輩ありて辯者を以て婦女子なりとの輕蔑心より論旨の如何と舌頭の巧拙の論なく忽ち攻撃をなす不敬を不顧ノウウくの發言者多きときは反して温言を以て陳辯を倦まで籠絡心を起して漸次に強辯を用ふべし彼等に撃つて最初より高聲を發するは不利益なり

第十八

一他人の演説中聴衆に於て大に喝采を博したる論旨の意味賛成したる箇所に注意し自己の材料の二助として参考

なすべし次會演するの利益となれり

第十九

一卑屈に似たれども聴衆を瞞着するも一策なれば甲の喝采を得し辯論を假用し乙の言辭を作用し暗に聴衆の舉動を探知すべし假令直接に緊要ならざるも大に好結果を得るの一助たるべし

第二十

一辯者非常に失敗を取り名譽回復せんには他に策なし引

續き日をトして次會を開き其際は會中の第一席に出演し人心を感動なすしむべき非常の演題を披露なすべし尤前會に失敗を取りし箇所を辯解なすに非らざるも少しく含蓄なしてつくちふべし

第二十一

一聴衆の謹聽傾聽する箇所は如何なる意味にありや又其好む所は如何なる辯に依るやは最も必要の點といふを熟知しをくべし

第廿二

一 論旨の高拙を問はず機に臨みては眞面目なるも滑稽に轉じ變に應じては喜怒哀樂共何れを挿入すべき部分なきに非らず或ハ設詭嘲言奇異なるも可なり然りといへども演題の本旨に侍る時は不都合なきにしもあらず唯策略に注意すべし

第廿三

一 如何なる名論卓説たりとも演説則ち口調の巧みならざる爲め動もすれば聴衆を去て欠伸をなさしむる事往々

ありかゝる時には一聲を轉じて諸君よ杯と活潑の意見あるが如き容体を顯はすべし

第廿四

一 前條の場合聴衆既に倦まんとして攻撃せんとする舉動はあれど論旨未だ半途に至らざる時にはまづ左に掲るが如き言を以て一時聴衆に満足を與へ置くべきが得策といふべし

諸君よ諸君に對し特に妾が希望する事があります夫は他事でもありません諸君今日最も貴重なる光陰を

消費して來臨あり、其の貴重なる時間の中尙ほ幾分か妾に貸して下さい妾は此に簡短なる語を以て一言申し度き一議があります諸君敢へて之れは贅言ではありません苟くも演壇に臨みうへは妾もまた思ふ事を述べませんの遺憾のみならず彼の吉田兼好の詞にもある通り思ふ事はぬは腹ふくる、とやらであります乍併俚言に言ふ下手の長談議で却つて高聴を煩らはすも無御迷惑でありますから止むを得ざるの廉を辯じますから尙ほ暫時は妾に其貴重なる時間を借用いたし度のごとくいただきます下界

如斯可成平和の言を以て寛恕を請ふべし此豫防の言に依つて聴衆は倦心を却つて此に至りて傾耳にて謹聴する事あるべし

第廿五

一婦人の演説は粗暴過激なる言語を廢し勉めて謙退辭讓の言語を用ひ愛敬を求むべし

第廿六

一 下等社會たる聴衆は婦人の演説會には其辯者の巧拙と

性質の如何を問はず一目にして其容貌の美醜に關して
意外の感覺を起すものなれば夫等の人物には一切着目
せず論旨の重大なるは政治學術、教育、經濟、宗教、其他雄壯
華麗に演説をなすべし

第廿七

一前條に記せる如く最初は稍々躊躇なく唯聴衆に阿諛事
なく高尚を旨とし將に局を結ばんとするに際しては眷
戀欽慕に堪ゆるならむるの言語を用ひ感情を起さしめ
悠々と退場すべし

第廿八

一尋常の論旨を以て聴衆更に感情なき時は全く本旨に背
くべきに非らざる非常の策にて攻撃を試み勇しく退場
すべし

第廿九

一時機に依りては一時曖昧なる言を發し不確なる理論も
確實なる如く確乎たる一論も態と聴衆に不審をいだか
す如く辯し稍々疑心の生ずるに當り更に按出せし如く

正當たる論旨を堂々説き出す時は非常なる感服を得さ
しむるものなり

第三十

一 仮令ば俳優が劇場に臨んで演ずる技藝もまづ道理は一
般にして其等級位置に應じて自己が本役(則ち割付)持
役が「忠臣蔵」と仮定すれば由良之助に據りて其由良之助
の性質或は其時代をも思想し尙其好める衣装言語(臺詞)
の用法を考按し工夫をこらして演ずる時は百中喝采を
博さず共また不評を取るにはあらず婦人(男子たり共)の

演説も畧ぼ同一にして演題は則ち役割にて其演題によ
り夫より種々意匠をこらし按出する處の全文を校正し
彼の衣装臺詞に至る迄満足せし上舞臺(否)演壇に臨むべ

第三十一

一 演説熱心の婦人に不係今日時勢の進歩尙一日も欲く可
からざるは勉強なれども近來婦人交際の道大に開けた
るに際し某の集會懇親送別宴會等に招待され説文等を
朗讀すは社會の常なれば平日に讀書著書共に其意味

に注目し能く暗記し置く時は従つて演説會々上演説の材料の一助たるべし

第三十二

一聴衆感服せし箇所稱賛せし意味は能く記憶すべし次會の参考となるものなり

第三十三

一自己の演説中特に信用を得とする際には

諸君よ妾が唯今辯じまする〇〇の敢へて諸君に賛成

を乞ふでもありませんが如何にも公衆の利益(或は云々)でありますから茲に一言をして注意をうながし或は御同感を「下零」斯のむとく豫言を用ひる時は必らず拍手喝采の聲は満場に響くものなり第一攻撃の豫防ともなるべし

第三十四

一演説に依りて智識を進めまづ自ら賢明博學と思はれんには教育論を以て日來専門となす者は經濟學を辨し或ハ理學に長じたる者は化學を説くべし舊弊の俚言に鼠

捕る猫は爪を隠すといふは昔時因循主義の例なれば鼠を捕るの猫ならば當時は虎の威をかりて龍と戦ふ勢力を有すべし沈着主義も時に臨みては嘲弄を受け失敗を取る恐れあれば廣く専門外をも演ずべし罵詈雑言は慎むべし

第三十五

一演説はあまり漢語のみを用ひ爲に満場の聴衆の中の無學力の者に通ぜぬ事あり爲に攻撃を受くる事あれば可成平和俗語を交へ時としては論旨に害なきと思ふ近時

（當日或は前日）の新聞紙に掲載したる事故も引證て用ふべし

第三十六

一演説に非常の二種あり一は他人と相似たる演題を表して其智力を試み一は他人に反對の題を出して主義をあらそう之れなり聴衆は其勝劣の又推測するに難ければ自然會場喝采の聲充満するものなり此他種々の口傳あれども大同小異にして大体男子の演説に異ならぬ畧し以下は未だ婦人社會に會て無き演説計

論會に臨み大に利益あるの條目を記載なしたれば以上の
課目と参考して演説熱心の婦人諸子の一助となすなり

第三十七

一演説討論會に臨んでは自論を主張し飽迄護し他説を駁
するを尋常の人情の一般なれ共自己の論旨は充分注意
を加へ漫りに自説を信すべからず

第三十八

一討論の要點は舌鋒を鋭くして飽まで主張して一歩も譲

るべからずと雖ども聴衆にして自己の説を尊敬するの否
と自己の主張する處の論旨に對してまた如何なる感動
を起さ居る哉を豫想すべし

第三十九

一演説の全体の論旨を顧みず一點の意を以て他説を無闇
に攻撃すべからず尤も輿論に反對するは不利益なれば
確たる缺點をとつて頗る議論を試むべし

第四十

一 凡そ討論に臨みて他説を反対し勝に乗じて結果を忘る事勿れ終りに至りて失敗を取るに至らば最初の勝利も實効を奏せず勞して効無なきの道理なり

第四十一

一 他説を駁撃するか或は他より反対する時は其答辯は一言たりとも注意すべし智慧なき小兒に智慧を授けるの俚言にて自己の高説をして他人の材料となる事あるべし

第四十二

一 演説中反對論の突然と攻撃あるも豫て覺悟し論旨中此點に至りては如何彼の説は此理を以て答えんと準備し置くべし

第四十三

一 他人の演説中其缺點の箇所を諒知し其論旨の明瞭なると不完全なるとを再考し自己の想像する處と參聽の諸氏の意見と粗同感なる歎を注意すべし

第四十四

一 他人の演説中本題の旨意狭隘にして或は本旨に關係なき余論を以て廣濶説と瞞着をする事もあれば左ある時には一層注意すべしまた全体の論旨格別攻撃を入れる、點なき時は其一部分をあげて大要を論じるも研究の一なり

第四十五

一 討論者より嚴格に議論を容るゝ舉動ある時は真面目に答辨すべきが正當なれども聊か嘲弄の言を用ひて反對

者が尙喋々議論を以て攻撃せんとせば轉じて一層嚴然たる語を用ふべし

第四十六

一 答辨は可成簡短なる語を用ふべし反對者が陳ずる語を漫りに信用すべからず本旨に不適當なるは制し不條理なるはとづかぬ過激の言を以て難じんよりは寧ろ嘲弄の語を以て攻撃すべし

第四十七

一 反對論者の自然錯雜なる語を以て駁論を發する時は悠然と其結尾迄彼が論旨を聴き而して自論の確手たるを陳述すべし

第四十九

一 自論を保護するには最初より陳んとする處の主意の一
二を後段迄口外せず彼れ若し反對を試むるに際し考按の語を發すべし

第五十

一 演説討論會は主義區々あると雖ども宗教の點に至りて
と就中反對者の多きものあれば自己の信ずる説確實に
研究なす事論をまたざといへども他宗の議論と其主意
を能く探究なり他宗の眼目則ち論旨の目的とする處を
一々陳べ而して自論を説明するなり唯自論の主義を頼
みて中央なる聴衆に淺慮なる笑ひを受くる事勿れ
以上記載する討論會臨席心得法の演説者にして日來着目
すべきの勝利必用の事なり委しく編を次で幼稚輩の演
説喝采必用法も記載すべし

明治二十年十一月廿八日版權免許
明治二十年十二月 出版



著者 香川倫三

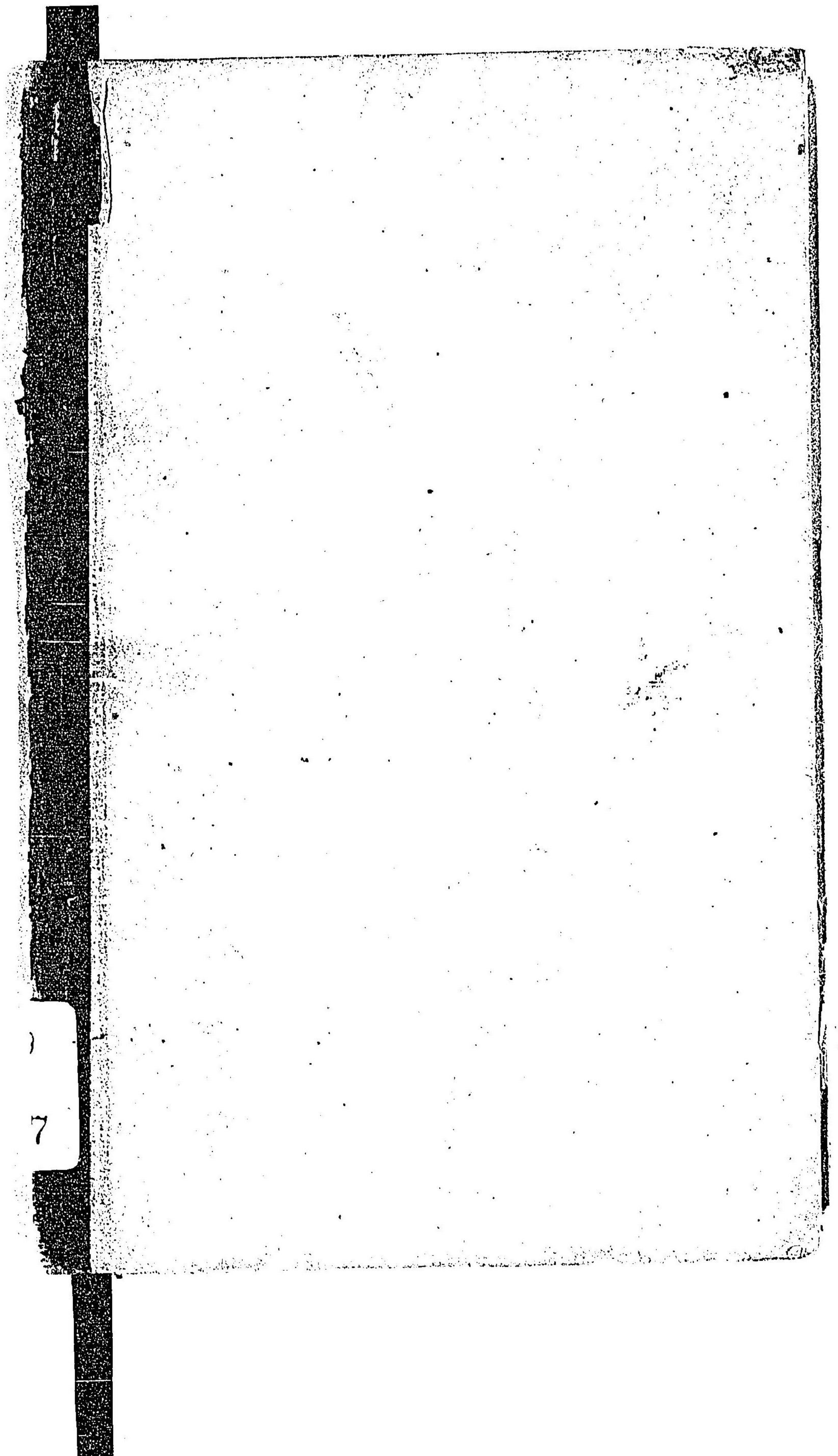
大阪府平民
大阪府北區真砂町
三十五番地

出版人 大淵 濤

京都府平民
大阪府南區末吉橋通三丁目
十五番地

發兌所 駸々堂本店

大阪心齋橋北詰四番地



7